



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.153

2016.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

49

「中央道長野線の 岡谷市・塩尻市内遺跡での思い出」

私は57・58年の2年間 財・県埋文センターに勤めた。木曾から岡谷市まで毎日自動車で一時間かけて通った。岡谷市9遺跡塩尻市2遺跡に関わり、私は現場指導が主でしたが、下り林遺跡は調査員が他遺跡を担当していたので私が担当した。高校生の頃戸沢充則さんが調査し私も一度戸沢さんに案内されたことがある思い出の遺跡でした。工事用道路拡幅の中狭い調査でしたが、戸沢さんが調査したタコツボを確認できたり、下り林式とした押型文土器を検出して嬉しかった。

遺跡を区別してはいけないと思うが、特別な遺物や遺構を見つけると私も調査員も興奮するし、学界からも注目された。

中島B遺跡 剥片や石槍が出土し旧石器時代ではないかと、しかも剥片が接合され石器製作過程がわかると、皆が剥片をいじり接合に一喜一憂した。専門家の指導をと声をかける仕事は私。戸沢充則・岡村道雄・松沢亜生・森山公一さん等に石器指導を、岡村さんの時には旧石器学習会も持った。地学的にもと信大酒井潤一先生や県農事試験場梅村弘先生も招いて地層・土壌調査をする。その後 隆起線文土器が検出され縄文草創期の遺跡とわかり、改めて注目された。

中島A遺跡 比高1.5mの段差のある畑と水田、まさかと思ったが水田部は北西から南東に走る断層で落ち込んだ窪地の低湿地遺跡で、縄文早期から晩期、弥生中期初頭、平安時代と遺物があり、特に縄文晩期が多く注目された。湿地なので湧き水が多く苦労するが、土器・石器・木製品をとり

あげる。調査員には本当に勉強になった。地質と花粉分析を酒井先生に、樹種を中島豊志先生に、昆虫を小林比佐雄先生にと専門家に依頼する。大久保B遺跡で断層が検出され地学を学んでいる弟松島義章に調査を頼むと松田時彦先

生と見えた。中島A遺跡では規模が広く断層面が確認され岡谷断層発掘調査研究グループが組織され、法政大学東郷正美先生を中心に57・58の2年間調査された。遺物では弥生条痕文土器が多く、大参義一先生の指導を受ける。石戈?と思われる石器について下条信之さんの鑑定を、同時に弥生大陸的磨製石器の講義を受けた。

大久保B遺跡 公団からいやみを言われて追加した遺跡。小形石室を持つ墳墓二基を検出し、一基からは火葬骨と副葬品唐式鏡が出土した。奈良時代の墳墓として注目され調査員が驚喜し、マスコミにも大きく報道された。小林三郎さんの現地指導で鏡の素晴らしさが指摘され、私は鏡を持って上京し中野政樹・亀井正道先生の指導を受け、東京文化財研究所に保存処置と鉛同位体調査をお願いした。同時代の鏡を出土している静岡県・岐阜県の遺跡の現地を訪ねる。この年 西日本埋蔵文化財研究会が『古代墳墓』のテーマでの研究会を京都で持つと聞いて発表を申し込んだ。前夜祭で「長野県も西日本か?」と、私は「長野県は東西文化の接点・交錯する地域です」と強調し納得してもらった。以後 東日本の研究者の参加が増えたという。

御堂垣外遺跡 縄文後期の甕張り土壇と山側に石垣を持つ重なり合う敷石住居址を検出し、敷石住居址は三回も重複して建てられていて調査担当者は本当に苦労した。中信地方で初見の住居址とあって敷石住居址を追っている山本暉久さんの指導を受け、合せて『塩尻市御堂垣外遺跡敷石住居址をめぐる』の学習会をもち、調査員だけでなく県内の研究者の参加で学んだ。

私は遺跡現地調査を調査員に分担担当させ、遺跡現地を訪れて進行状況の確認と調査の助言をした。大事な遺構や遺物については調査員の学力をつけるために私の繋がりそれぞれの専門家を招き指導を受けることで、調査員も私も学べる努力をした。これが私の出来る一番の仕事でした。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲大久保遺跡石室(光っているのが鏡)

目次

■田舎考古学人回想誌 長野県埋蔵文化財センターの設立と調査部長に 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第146回) 植木 弘 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第12回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「タネをまく縄文人」 副島蔵人 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第12回) 岡田 淳子

⑫八王子の遺跡調査

帰国して定職がないのを幸いに私は娘と過ごし、独りっ子で育った夫は、娘に兄弟を与えてやりたいと望んでいた。幸い思いが叶って間もなく、八王子市教委から遺跡調査を指導してほしいという依頼があった。私は前述の理由で一旦お断りしたが、高校生のころから教えを受け、尊敬している甲野勇先生からのたっのご推薦とのことで、最終的にはお引き受けすることになった。

八王子の仕事は、このときの中田遺跡からはじまって、鞍骨山遺跡、梶田遺跡、寺田遺跡と続き、ここで育った若者たちは、日本の各地で活躍してきた。

最初の中田遺跡は、都営住宅建設のための用地で、浅川の中洲に残された微高地に、古墳時代から奈良時代にかけての庶民の集落があるとして知られていた。

私は甲野先生の下で仕事ができることを嬉しく思い、張り切った。まず東京都内で考古学を学べる大学すべてに連絡し、夏休み中に学生さんの発掘応援をお願いした。調査を担当する私たちの出身校からは「研究室の都合で」と断られたが、他のすべての大学からは快い返事をいただいた。

大学の研究室ごとに参加日程が示され、私はそれを割り振って作業を進めた。朝、みなが集まると昨日の成果と今日の調査の進め方を、現場で輪になって説明する。夕刻には、少し早く仕事を切り上げて、グループごとに今日の進行状況を報告する。情報を全員で共有することが何より大切だと考えたからであった。

もうひとつ心がけたことは、発掘に伴う自然科学的な調査を、専門家に頼んで行うことであった。当時はまだほとんど無かったこの種の研究を重視して、最もよい時期に遺跡に来て資料を採取してもらう。調査団長の甲野先生は、私の調査方針にすべて賛成してくださったし、八王子市職員で後輩の服部敬史氏は、実に有能で良く努めてくれた。服部さんがいなければ、八王子のプロジェクトは成功しなかったろうし、また私の生涯に大きな影響を与えるものとなった。調査の応援をしてくれた諸大学のグループも、それぞれに好意的に力を発揮してくれた。この調査以後、「中田遺跡でお世話になりました」という人に、どれだけ多く出会ったことだろう。八王子の調査は、私にとっても大きな意味をもつものであった。

これほど理想的と思われた発掘調査にも、難しいことはあった。私が研究者として認められていなかったために、そんなに大きな調査を若い女の子に任せていいのかという中傷や、

もっと下まで掘るべきだったという批判や、熟語の使い方がおかしいという非難まで飛び出した。名も無い女性の調査については、見

に来て結構よくやっていると思われたし、下まで掘ることについては、最後に小型のブルドーザーで駄目押しをしながら確認したので、決して掘り残しはないと信じていた。熟語については練れていなかったと反省すべき余地があった。

5ヶ月の身重であったにも拘らず、梯子に上って、住居址の俯瞰写真を撮ることもあった。今思えば冷や汗ものだが、当時の私には当り前のことだった。九千坪の調査区域は、南北が川の流れで区画されていたため、西の一部を除いて独立した一つの村の全体を調査したことになり、それなりの成果が得られた。出土した土師器の年代は約50年を1時期として分析されたし、住居内の炉が竈に進化する様子も確認された。数軒の家がグループを作って暮らしていたらしいこと、大きく整然とした住居の造りが次第に小型化し、雑になっていく変化なども見る事ができた。

八王子中田遺跡I、II、IIIとした3冊の報告書のほかに、服部さんが村の在り方について、私が住居の変遷について、共著で土師器の型式変遷について論じている。報告書はその後しばらく発掘調査報告のモデルになり、多くの研究者から引用された。

八王子中田遺跡の調査はこうして完結を見たが、最後の報告書が校了になったとき、甲野先生はそれを確認して、彼岸へと旅立たれた。癌に侵され長期に療養されていたにもかかわらず、体調のよい日には発掘現場に足を運んでくださったし、ひたすら、現在生きている人を第一に考えるようにと諭された。とかく研究者エゴに走りがちな私たちへの警鐘であったと思う。こういう筋金入りな先生の判断で、八王子中田遺跡の調査はつつがなく終了したのであった。

発掘した竪穴は、全部で134箇所、一辺11mを超える大型の竪穴は住居だけではなく、集会場を兼ねていたのかもしれない。竈の他に床の中央付近に炉を持っているものもあった。周囲に土手が巡らされたような竪穴や、^{ふいご}竈の一部や湯玉を出す鍛冶工房と思われる遺構もあり、遺物の集積があった竪穴は、使用後に送り場として使われたものかも知れなかった。竪穴の他に、水路と思われる遺構が目をつけた。北側から南側に微高地を切り拓いた溝は、水を流すことを意図したものと思われ、時期を確定することは難しかったが、村が形を整えて後に、あるいは中世まで永く使われたものと思われた。

私が心に引っかかっているのは、この遺跡が多額の費用と時間をかけて40年後に「再発掘」されたことである。都営住宅建て替えの機会だというのが、私には理解しがたい思いが残った。



▲中田遺跡 朝の集会(画面左側に立つのが岡田)

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁葦子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 146

白山四丁目遺跡 ～東京都文京区～

植木 弘

筆者にとっては、お気に入りというよりも忘れ難いというべき遺跡を紹介させていただきたい。

すでに35年以上経過してしまい、あるいは、筆者自身のイメージの世界で無意識のうちに増幅してしまっている部分もあるのかもしれないが、今もその記憶は鮮明だ。そのころの筆者は、2度目の留年が決まりかけていながら都内の発掘調査に参加していたところをスカウトされてこの遺跡の調査を担当することになったと記憶している。

調査は、当時の日本専売公社宿舍の改築に伴うもので、文京区白山四丁目遺跡調査会が組織され、1980年12月から翌年の2月にかけての非常にタイトな日程で計画された。召集されて調査に参加したのは、卒論を提出し終えたばかりの4年や3年の専攻生ばかり10数人であった。

遺跡は、元禄のころに武家地として造成され、旗本屋敷跡の置かれたことが記録に見えるが、縄文時代の貝塚の一部である可能性があるということで実施された試掘調査の結果、江戸時代に限定される遺跡と判明したのである。文京区内では縄文時代を主体とする動坂遺跡で、すでに江戸時代の遺構が調査されていたが、純粋に江戸時代のみを遺跡の発掘調査は、当時都内においてもほとんど初めてのケースというべきものであった。

検出された遺構プランは、大小の円形や方形のピットであったが、掘り進むにつれていくつかの類型のあることがわかり、『動坂遺跡』の調査報告書を参考書にしながら見れば、なるほど、造り付け階段の先に天井を掘り残した広い横穴空間を持つのが地下室(むろ)遺構らしい、あるいは、いくら掘り下げても底の現れない井戸跡と予想される遺構には円形のものや小さな長方形のものがあるらしい、などといったことがおぼろげながらも見えてきた。さらには、そうした遺構が、多量の陶磁器、土器、貝殻などを継続的に投棄した、当時のごみ穴になっていたことも確認された。

調査区を埋め尽くすのは、従前ならば攪乱として無視されそうな遺構ばかりだったが、それらを丁寧に掘り進むという作業は、想いの外手間隙のかかるものであった。いつしか作業は休日返上、昼夜兼行となり、追い討ちをかける厳しい寒気に、若い学生たちであっても徐々に疲労の色が濃くなっていった。そんなある夜、そろそろ終電かという時刻になってそれは唐突に現れた。現れたという表現が適切かどうか、とにかく出現したのである。地下4mほどまで掘り進められた井戸跡と見ていた遺構の側壁にぽっかりと空洞が開き、白く靄に覆われたその奥にトンネル状の空間が続いているらしいのだ。

日を置かず、謎の地下道は3箇所を確認されることとなった。2×3尺大の長方形の縦穴2基は地下への出入り口となる縦坑であり、地下5～6.5m程で横坑が延びる事が確認できたのである。側壁には手足をかけるための小さな掘り込みが縦に連なっていて、両足を開いて昇り降りする梯子の役目を持っていた。実際、計測後は脚立が不要となった。更に、井戸によって

塞がれた別の横坑も発見する。これら横坑は複雑に枝分かれしていて、中腰で歩ける高さもあれば、横這いになってようやく通れる箇所もあった。横坑の天井や壁には当時の工具痕が明瞭に残り、また、照明用の灯明を置くためと見られる棚状の小さな掘り込みも設けられていた。坑道は、縦坑接続部以外に土砂の流入堆積は僅かであったが、随所に人為的に積み置かれたロームブロックが行く手を阻み、水の溜まった所もあって、3箇所の坑道が連結することは確認できず、確実に調査区外へと延びていると予想される坑道のその全貌を把握することはとても困難な状況であった。

にわかに出現した地下坑の存在に、我々はただただ興奮状態だったが、徹底した調査を継続するには、与えられた調査期間や安全管理に限界があり、無念ながらも止むなく終了となった。従ってこの地下坑跡の全貌はもとより、機能、用途、目的等については謎のままとなっている。しかし、冷静に振り返ってみれば、ヘルメットも被らずに地下深くの素掘り坑道を這い回っていた我々の調査は、無茶で無謀な行為と非難されても仕方なく、むしろ事故がなかったのが幸いであったというべきなのかもしれない

発掘調査のメンバーは、そのまま整理報告書の刊行にもかかわることとなった。染付け陶磁器の微妙な呉須の濃淡をどう表現したらよいか、試行錯誤した結果、梨地スクリーンの濃淡の貼り分けで解決することができた。それは調査以上に手間を要する作業となってしまった。

江戸の陶磁器は、現代の陶磁器と基本的に何ら変わらない。しかし、原始古代の遺物を見慣れた我々には、かえって得体の知れない存在であった。陶芸家の奥磯栄麓氏をお迎えし、産地や年代を鑑定していただいたことは、とてもありがたかった。氏のつぶやき「こりゃあ珍品やねえ」は、しばらく我々の間で流行語化した。

数年後の後日談になるが、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館に出入りしていたとき、構内の佐倉城跡を発掘調査された歴博の先生方が、出土遺物の扱いに苦慮していると伝え聞いたので、『白山四丁目遺跡』の報告書をお送りしたところ、大変役に立ったと丁寧なお礼状を頂戴した。当時の江戸時代の考古学のおかれた状況がお分かりいただけると思う。なんとなくわかっているつもりでの江戸時代の暮らしが、考古学的に見れば、実はほとんど検証されていなかったというのが実情だったようである。

都内をはじめ、江戸期の遺跡の発掘調査事例は、この後急速に増えていった。そうした意味で白山四丁目遺跡の調査は、本格的な江戸考古学研究の先頭集団に加わっていたのではないかと、ひそかに自負している。

調査が夜分に及んだとき、路地裏にやってくる現代の夜鳴き蕎麦(チャルメラの音)が待ち遠しかった。そんなことも忘れられない一齣となって思い出される。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは村上伸二さんです。

考古学者の書棚

「タネをまく縄文人 —最新科学が覆す農耕の起源—」

小畑弘己 著／吉川弘文館(2016)

副島 蔵人

「縄文人は狩猟採集民だ」私は職場に展示されている縄文時代中期の土器や石器を見て、そう思ったことは一度もない。だからこそ、タイトルを見て本書をすぐに手に取った。

吉川弘文館が出版する「歴史文化ライブラリー」の一冊。圧痕法とコクゾウムシを大きなテーマとして5つの章に分かれている。

ダイズと縄文人

縄文土器の圧痕として熊本大学が発見したダイズ「クマダイ」から、縄文時代における栽培化作物としての豆類(ダイズ、アズキ)に着目している章である。

人間が食糧生産のために野生植物を栽培すると、「種子の自然散布の喪失」や「種子の大型化」など、栽培化徴候群(Domestication syndromes)と呼ばれる性質・形質的な変化が植物側に現れる。こうした徴候の認められるダイズやアズキの圧痕が縄文土器から検出された事例から、先史時代の東北アジアにおけるダイズとアズキの栽培化起源地のひとつが日本列島であったと述べている。

また、北陸・中部・西関東地方のダイズやアズキの圧痕サイズは縄文時代中期に大型化するが、この種子の大型化という栽培化徴候の発生には栽培を開始してから1000年以上かかるそうだ。逆算すれば、少なくとも縄文時代前期には既にこれらの栽培が開始されているという指摘に、私の持つ縄文時代のイメージは大きく変わった。

縄文人は豊かな狩猟採集民か

本書には主役である「圧痕法」と「コクゾウムシ」以外にも「農耕の証明」が通底したテーマとして設定されている。この章ではそうした農耕の定義と縄文時代の栽培植物がメインとなる。

縄文時代に農耕はあったのかという問題には「農耕の定義」と「出土植物資料の資料学的評価」の二つの問題が絡んでいると指摘している。日本の考古学者が農耕の定義を狭くとらえていることと、農耕と水稻耕作がほぼ同義になってしまっている事は大きな問題であり、「農耕」というキーワードが日本考古学界の中でいかに狭義の用語として用いられているかを再認識させられる章でもある。

また、種子そのものを食べてしまう豆類・穀類と果皮が廃棄される堅果類では遺跡に残される確率がかなり違ってくるため、栽培植物の量的少なさが栽培植物の存在を農耕と評価する際のブレーキとなってしまっているという指摘も、資料解釈の上で看過することはできない。

コクゾウムシと縄文人

本書の主人公ともいえるコクゾウムシのパート。コクゾウムシをはじめとする害虫の圧痕が土器から発見されることの重要性がよくわかる。

小畑氏らによる縄文時代早期の土器からのコクゾウムシの発見が、それまでイネの存在と関連付けられてきたコクゾウム

シを、稲作の到来という伝播論とは切り離し、コクゾウムシの加害対象が堅果類であった可能性を指摘している点には驚いた。

昆虫は種の同定がしやすく、数百万年間、形態的・遺伝的变化に乏しいようだ。また、種によって繁殖や生活に必要な環境や食物が異なるため、その土器が作られた環境を表す指標となるとのこと。つまり、それらの昆虫の存在によって当時の人間の衣食住環境を知ることができるのである。

さらに、圧痕として残る昆虫はほとんどが屋内型の害虫で、野外種の紛れ込みが少ない点、そして、昆虫圧痕のほとんどが、土器制作時に押込められた圧痕(impression)ではなく胎土中に練りこまれたものの抜け殻(cavity)であるという点も非常に興味深い。縄文人の害虫に対する意識を考へてみるのも面白い。

イネはいつ日本にやってきたのか

「日本の農耕の歴史」を考へるうえで避けては取れないのがイネの伝来時期とその経路である。レプリカ法を基軸として蓄積された調査研究成果をもとに示された、大陸系穀物を含む日本の農耕化段階説は非常にわかりやすい。

圧痕法が明らかにしたもの

レプリカ法をはじめとする土器圧痕調査の歴史やその手法などについて述べられている。また、圧痕種実が炭化種実等の資料に比べて、資料そのものの残存率と同定率の2点で優れており、コンタミネーションがないという圧痕法の特長などをわかりやすく解説している。そして、従来のレプリカ法だけではなくX線CTを用いた圧痕探査法や3Dマイクロスコープによる3D復元の手法を、再定義した圧痕法として紹介している。さらに、器面に圧痕が露出しない潜在圧痕を探す徹底的な悉皆調査には軟X線(ソフテックス)が有効であると述べており、先端技術を用いた圧痕調査を知ることができる。

本書は、考古学を研究する者が植物や昆虫そのものの特性を十分に理解することによって、それらの圧痕が残る土器が出土する遺構や共存する遺物、さらにはその遺跡との関係を、より一層説得力のあるものにすることができるという点に気づかされた一冊であった。

縄文時代中期には栽培化徴候群の認められるダイズ圧痕、すなわち栽培の物証が出てきている。にもかかわらず、未だ多くの考古学者が栽培あるいは農耕のある縄文時代像を描けていない。「見ようとしなければ何も見えない」本文中の小畑氏の言葉である。我々は縄文人が畑を耕している風景をまだ見ようとしていないだけなのかもしれない。

アルカ通信 No.153

発行日 2016年6月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp